

平成30年度 教育事業 海からのメッセージ

～カヌーと徒歩で、始良カルデラー一周111kmにチャレンジ～

- 1 趣 旨 水深200mの深海をもつ雄大な鹿児島（錦江）湾を舞台に、異年齢との交流を図りながら自然の素晴らしさや厳しさを体験することにより、「生きる力」を育む。また、長期冒険型活動を通して、肯定的な自己概念や協調性・信頼感を育み、不登校など心に悩みをもつ青少年の自立も支援する。
- 2 期 日 平成30年8月11日（土）～17日（金） 6泊7日
- 3 参加対象 小学5年生～高校生（不登校など心に悩みをもつ児童生徒を含む。）
- 4 募集定員 30人
- 5 参加者 32人（小学生17人 中学生9人 高校生6人）
- 6 指導者 外部指導員4人 国立大隅青少年自然の家7人 ボランティア11人
- 7 日 程

期日	行程	移動方法等	宿泊場所	移動距離
8月11日 （土）	新城海の家～海潟漁港	カヌー：途中、曳航有	協和小学校	約14km
8月12日 （日）	海潟漁港～東桜島漁港 東桜島漁港～桜島港 桜島港～鹿児島港 鹿児島港～吉野東中	カヌー：途中、曳航有 徒歩 フェリー 徒歩	吉野東中学校	約23km
8月13日 （月）	吉野東中学校～重富漁港 （白銀坂経由） 重富漁港～隼人漁港	徒歩 カヌー：すべて曳航	富隈小学校	約22km
8月14日 （火）	隼人漁港～国分海浜公園 国分海浜公園～境漁港	徒歩 （台風接近のため、カヌーを中止） バス移動 （熱中症対策、参加者の疲労蓄積を考慮、グループミーティングを重視）	境小学校	約19km
8月15日 （水）	境漁港～道の駅たるみず～道の駅たるみず～海潟漁港	カヌー 徒歩	協和小学校	約19km
8月16日 （木）	海潟漁港～新城海の家	カヌー：途中、曳航有	新城海の家	約14km
8月17日 （金）	7日間のふりかえり	<u>※曳航の理由は強風のため</u>	<u>※学校は</u> <u>体育館泊</u>	12:00 解散

8 事業の企画・運営

- (1) スタートとゴールを同一地点とし、6日目までにゴールする行程とした。その結果、参加者がゴール後にカヌー等の片付けまで分担して作業ができ、最終日は、ふりかえり（個人・グループ・全

体)の時間を十分とることとした。

- (2) カヌーによる移動距離が多い行程を企画したが、漕艇指導を依頼した外部指導員と相談を重ね、リスクの高い行程の一部は徒歩に変更した。
- (3) 募集定員を超える応募があったため、6人×5班の編成予定を、班構成と食事準備に配慮し8人×4班編成に変更した。その結果、強風時に班編成を崩すことなく救助艇4艇で曳航できた。
- (4) 各市(鹿屋市、垂水市、鹿児島市、始良市、霧島市)や関係機関(海上保安部、漁業協同組合、警察署、消防署、小学校、中学校、病院)と連携を密にし、活動中の安全対策を万全にした。



9 参加者への課題

111kmのチャレンジ以外に、以下の課題を設定した。

- (1) 班の中での役割は、班長も含めてグループで相談して決める。

- (2) カヌーのペアは、学年や体力を考慮し、ボランティアリーダーとのペアの選択も含めてグループで相談して決める。(強風の影響により、安全上の理由でボランティアリーダーとのペアを固定した日程が多くあった。)
- (3) 6日目のキャンプファイヤーの出し物をグループで相談して決める。

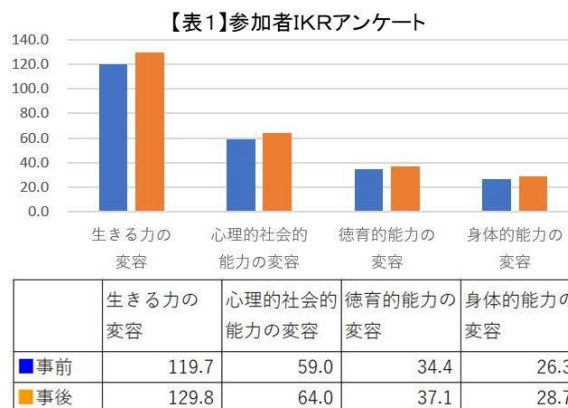
10 参加者の変容

- (1) 昨年度の反省を踏まえて初日にカヌーの練習時間を十分にとったが、全体的に、初日はカヌーの漕ぎ方も上手にできず、かなり時間がかかった。今年度は台風の影響もあり、救助艇で曳航する距離が長くなったが、最終日には一漕ぎ一漕ぎが力強くなり、逆風の中でもゴールにたどり着くことができた。
- (2) 生活面では、グループ活動を重ねる中で、作業を分担したり、自分から進んで動く姿も見られた。また、中日となる4日目にボランティアが主体となり、全員でレクリエーションを行い、グループ内の会話や意見交換も多くなった。
- (3) 集団での活動にいつも遅れしまう小学5年の男子児童がおり、2日目まではボランティアや職員が個別に対応して活動をしていた。その後、グループ全員でフォローしたいとの申し出があり、遅れても彼のチャレンジ、グループのチャレンジを続け、他の参加者もそのチャレンジを受け入れた中で最終日のゴールまでたどり着くことができた。ふりかえり際には、全員の前で遅れることなく自分の言葉で感想を話すことができた。
- (4) 不登校の傾向がある参加者がおり、体調面に不安を抱えて参加していたが、初日から頑張り、船酔い等も睡眠不足が理由と自覚して、体調管理を心掛けていた。後半には、曳航が続いていた活動に対して、自分達でゴールしたい、仲間と別れるのが悲しいと前向きな感想が見られた。また、担当ボランティアは、班のみんなに意見を言えるようになったと成長を確認している。事業後は、学校に通う回数も増え、事業への参加をきっかけにして生活に変化が見られたと学校から報告があった。

11 アンケート結果

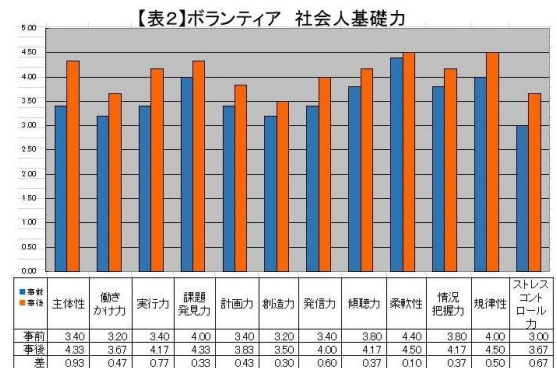
(1) 参加者IKRアンケート結果

生きる力の変容を見ると、事前から事後にかけて10.1ポイント向上し、有意差が見られた。【表1】その中でも「先を見通して、自分で計画が立てられる」、「自分の問題点や課題を見つけることができる」(視野・判断)の内容に特に大きな向上が見られた。6泊7日という長期宿泊体験及び111kmという長い距離を進む活動を通して、全体の動きに合わせて自分の計画を立てたり、他者とのグループ活動の中で自分の問題点や課題を見つけることができたと考えられる。



(2) ボランティアの社会人基礎力アンケート

参加者の活動及び生活を支援する役割で、法人ボランティア11人を各グループに配置した。また、6日目のキャンプファイヤーの運営も依頼した。事業の事前・事後に「社会人基礎力の自己診断シート」を実施した。結果は、【表2】である。社会人基礎力では、すべての項目で向上が見られ、主体性は著しい向上が見られ、実行力も大きく向上した。6泊7日という長期宿泊体験を通して、各グループの個別の状況に合わせて各ボランティアが悩みながらも、積極的に取り組み、目標を自ら設定し粘り強く取り組めたと考えられる。その反面、柔軟性の変化は少なく、相手の意見や立場を尊重し理解することが難しかったと振り返っていることが分かる。



12 参加者・保護者の事業後の感想

(1) 参加者の感想

- ・仲間と協力することが大切だということを意識しながら学校生活を過ごしています。
- ・すぐあきらめていたけれど、今は最後まであきらめずに一生懸命に取り組むことが増えました。
- ・海が好きになり、苦手なことも頑張ったり、年下の世話も上手になったように思います。
- ・「自分一人でやる」、「自分はやらない」よりも、「仲間と協力する」ことを選ぶようになりました。
- ・今回の経験で、見たことだけで決めず実際に行動してから決めようと思った。
- ・人を見た目で決めず、多くの人とコミュニケーションをとれるようになりたいと思った。

(2) 保護者の感想

- ・これまで楽なことばかり選んでいたが、以前より頑張る姿が見られるようになりました。
- ・同級生との関わりをあまり得意としていませんでしたが、日頃できない活動・チーム活動・6泊7日の大きな成功体験から本人なりに学び、関わりが積極的になりました。
- ・相手の気持ちを受け入れよう、チャレンジしてみようという姿が少しずつですが見られます。

13 成果

- 6日目にゴールし、7日目にふりかえりの時間を十分に持つことができたため、個人でのふりかえり、班での共有、全体での発表ができ、1月の再会に向けての目標設定に繋がった。
- 錦江漁協と垂水漁協の協力は、事前下見を船から実施し、関係する漁港との打合せや当日の協力を受けることもできて大変大きかった。また、鹿屋体育大学の協力（救助艇の装備も含め）も大きかった。
- 海上保安庁、関係市町村、教育委員会、学校、漁協組合、消防署、警察署、病院等の関係機関すべてに連絡し事業当日に安心して運営できた。スタッフしおりに、すべての連絡先の掲載が必要だった。
- 個別対応が必要なグループがあったが最初は職員対応とし、3日目からグループで個人のチャレンジをサポートする動きとなり、全体でも個人のチャレンジを支えることを共有できた。